第２回高知県立高知国際中学校・高等学校　学校説明会　要点

平成２９年３月２０日（月）１０：００～１１：４５
県民文化ホール（オレンジホール）

●開会の挨拶要点

高知県教育委員会事務局　教育次長　　永野　隆史

【第２回学校説明会について】

・３連休の最終日に、それぞれのご予定もある中、沢山の方にこの学校説明会にお越しいただき、感謝申し上げる。

・２月２６日に実施した第１回説明会では、申込を大幅に超えた申込があり、会場が満杯でお断りをした方もあった。その節は大変失礼した。あらためて、お詫びします。

【社会環境の変化】

・社会や経済の姿が大きく変貌し、予測できない社会変化が起きている。それに伴い、教育も変わってきている。

・子供たちを取り巻く環境の変化も進んでおり、世の中が予想をはるかに超える速いスピードで動いている。

・例えば、人工知能、あるいは大型コンピューターなどが普及し始め、第４次産業革命と呼ばれている。

・このような世界に対応するために、教育においても、子どもたちへの新たな向き合い方が必要になってきた。どういった教育をするのか、またその教育でどのように子どもたちが育てば、これからの世の中を形成できる子どもたちになるのかを、我々は真剣に考えてきた。

【新しい学校の特徴である国際バカロレア（ＩＢ）の教育プログラム】

・ヨーロッパで生まれたこの教育システムは、日本でも今世紀に入り、沢山の研究が進められてきた。

・本日も、この教育プログラムの中で子どもたちをどのように育てていくか、これからの日本の教育の歩み、世界の教育の歩みなど、説明がある。

【高知国際中学校・高等学校について　】

・高知南中学校・高等学校と、高知西高等学校が一つになりできる学校である。

・両校の特色を受け継ぎ、さらに国際バカロレアのエッセンスの入った学校をつくるために準備を進めている。

・高知西高等学校の敷地には、現在、新しい学校の施設も造っている。

・この学びが高知だけのものではなく、全世界に通用する学びにしていきたい。

・現在、世界には４８００校近くのバカロレア認定校があり、日本にも増えつつある。

・公立学校のこのような挑戦は、まだ珍しく高知はその３校目となる。

・こういった意味からも、皆様には高い関心を持っていただいていると思う。

・次期学習指導要領でも新しい教育目標である「主体的、対話的で深い学び」が掲げられた。知識の獲得だけでなく、獲得した後に自分学びと他者の学びを合わせて、自分をさらに高めていくことが求められるし、公立学校でも、そのしかけをしていかなければならない。

【本日の講師について】

・国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員：坪谷ニュウエル郁子（つぼや　にゅうえる　いくこ）氏

・教育改革や新しい学び方、また国際バカロレアとは、どのような教育なのかを会場の皆様にお示しいただけると思う。

【最後に】

・短い時間ではあるが、本日の説明会でエッセンスを持って帰っていただきたい。

・これからも皆様のご期待にそえるような学校づくりをしていくので、公立学校の意欲も感じていただきながら、たくさんの子どもたちに来ていただけるようにお願いしたい。

●講演要点

講演：「国際バカロレアの概要　～世界と日本～」

国際バカロレア　アジア太平洋地区委員　坪谷　ニュウエル　郁子　氏

・２１世紀に入って変わってきたことに、パソコンやスマートフォンを個人で所有するようになったことがある。

・このような中、産業界では、今までの教育のあり方では社会に対応できないのではないかといった話合いがされてきた。（世界が変わってきたので、教育もかわらなければいけないのでは。）

・そこで、教育に求められるスキルが挙げられた。求められていることは、「考える方法」「働く方法」「働くためのツール」「世界の中で生きること」。これは、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）からも同様のことが言われている。（資料２）

・学びは学校でだけで行うのではなく、生涯にわたって学び続けるものであるようにしていくべきだ。

・アメリカの研究者の発言。「アメリカの小学生の６５％は、大人になった時、今は存在しない職に就く」（資料３）

・イギリスの研究者の発言。「現在ある４７％の職種は、１０～２０年後にはＡＩ（機械）に代わる」（資料４）

・世の中の変化に伴って、日本の教育も変わってくる。例えば、大学入試のあり方が変わる。（資料５）

・学習指導要領の次期改訂が目指す、育成すべき資質・能力をつけるには、「どのように学ぶか」が重視されている。（資料６）

・日本の産業界から「ＩＢのディプロマ課程はグローバル人材を育成する上で有効な手段の一つである」また、「大学入試における活用や企業採用時や人材育成において適切に評価することが必要」と提言があった。（資料７）

・政府の方針としては、２０１８年までにＩＢ認定校を２００校に増やすと閣議決定された。（資料８）

・国際バカロレア（以下ＩＢ）は、スイスのジュネーブで設立された非営利教育機構。（資料９）

・理念は、「多様な文化の理解」「探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を目的にしている。人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、生涯学び続けられるよう働きかけている。（資料１０）

・１０の学習者像をもった資質の育成をするのがＩＢである。（資料１１）

・英語のできる人を育てるのではないのか？それがグローバル人材の育成ではないのか？といった質問を受けることがあるが、ＩＢは全人教育であり、１０の学習者像のような人材育成をすることにある。本当のグローバル人材というのは、１０の学習者像のような素質をもち、教育の中で学んできている

人のことを言う。

・ＩＢのプログラムには、４つのプログラムがある。（資料１２）

・ＩＢの導入校が世界でどのように増えているか。低学年（ＰＹＰ：小学校段階やMＹＰ：中学校段階）から育てていこうというのが、世界の傾向である。さらに南米のエクアドルでは急速にＩＢ校の導入が進んでいる。アジアでは、インド、中国、パキスタン、マレーシア、インドネシアでの導入が増えている。（資料１３、１４）

・MＹＰとは、どのようなものか。これを終えると、生徒は自分は何が好きか、何に興味があるのか、何が得意なのかがわかるようになる。（資料１５）

・ＤＰでは、自分の好きなこと、得意なことを生かしてどのように社会貢献していくのかを見つけていく。（資料１６）

・ＤＰは理系、文系に分かれていない。極めてリベラルアーツ（大学で学ぶ教養課程）に近い形である。

・カリキュラムについては、６つのグループと３つのコアを履修する。（資料１７、１８）

・１２日間にわたる卒業試験についての例（資料１９、２０、２１）こういった問題に対して、生徒は論文を作成し、プレゼンテーションをする。（これが、日本語で受けられるようになった。）

・ＤＰの終了資格条件について（資料２２）。ここ最近の平均点は３０点前後でその取得率は８割程度ということから、ＩＢのスコアは信頼に値すると言われている所以である。試験は、５月と１１月に世界中で一斉に実施される。

・世界のスコアの活用の仕方には、英国式と米国式がある。（資料２３）英国式とは、日本におけるセンター試験のように基準があり、換算表によって読み取れるようになっている。（資料２４、２５、２６）米国式は、ＳＡＴという試験を全員が受験しなければならない。その上にＩＢのスコアに加点する方式をとっている。（資料２７、２８、２９）

・ＩＢの生徒は、どのような学部を選択しているのか。（資料３０）

・国立大学の入学者の定員の３０％をＡＯ入試、国際バカロレア入試を取り入れて拡大していく（資料３３）

・自分の学校で生徒を見て感じることは、「子どもたちは私たちの未来である」「教育は子どもたちを変える力がある」ということは、教育で未来は変わるということ。

・私が東京で経営しているインターナショナルスクールは、各国の駐在員の子どもたちが通学しているが、その授業料は高い。教育に経済格差が影響することのないように、公立学校でできるところがあれば応援したいと以前より考えていた。

・日本の公立で、国際バカロレアの導入に前向きに取り組んでいる自治体は少ないが、その中で導入に向けて取り組んでいるのは高知県であり、素晴らしいことである。

・世界を、日本を、四国を、高知をより良くすることに活躍できる人材を育成するための新しい学校が高知にできる。公立中学校・高校にできるということは、国際バカロレアだけでなく、日本のすばらしい教育の融合ができるということ。これは、基礎学力の力が強いということだけでなく、道徳心や協働、共同する力が育成されということになる。

・高知から新しい人材が出てくることが楽しみである。中学校の第１期生の卒業式には、ぜひ呼んでほしい。私も一生懸命、応援したい。

学校説明・質疑

高知県教育委員会事務局高等学校課　　課長補佐　　高野　和幸

【第１回学校説明会ベネッセコーポレーション説明「大学入試改革による中高の学びの変化」の要点】

・今回の教育改革は、高校教育、大学入試、大学教育の三つを一体とした教育改革である。

・これまでの学習指導要領には、「何ができるようになるか」という目標と、「何を学ぶか」という学習内容は示されていたが、「どのように学ぶか」という学習方法は、学校や教員に任されていた。

・今回の改訂の方針では、「主体的・対話的で深い学び」という、いわゆるアクティブ・ラーニングの手法で学習することがあげられている。国際バカロレアは、究極のアクティブ・ラーニングによる学習の姿であり、国も目指している学びの在り方の一つである。

・中学校は平成 33 年度から、高等学校は平成 34 年度からの実施になっている。（総合的な学習の時間などのように、教科書に依らない教育活動は、先取り実施が可能なスケジュールになっている。）

・大学入試については、現在の中学２年生が受験する時に大学入試センター試験に代わる、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が実施される。

・具体的には、思考力や表現力を問うための記述問題を出題することが検討されている。また、英語については、英検などの外部試験の導入も検討されている。

・全国の国立大学で構成する国立大学協会は、平成２７年９月に、「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」を発表しており、その中で、推薦入試、ＡＯ入試、国際バカロレア入試等の募集を入学定員の３０％を目標に拡大していくこととしている。

・こうした教育改革の背景には、人工知能が仕事を取って変わるなどの、社会のニーズが変化することで、今ある職業が無くなったり、新たな職業が誕生したりすることにある。

・予測不能な社会の中を、「力強く生きていくための学び」や「どういった局面においても対応できる学び続ける力」が必要。

・高知県でも外国からの大型客船が入港したり、ユズに代表されるように一次産業分野においても外国との取引が行われるようになっているなど、外国の人たちと、お互いの文化を理解し合いながら、コミュニケーションを図り、協働して働くことができる人材が必要とされている。

・このようなことから高知県においてグローバル教育に取り組むこととし、そのリーディングプロジェクトとして高知国際中学校・高等学校を開校することとしている。

【学校の概要について】

・学校の教育目標は、グローバル人材の育成を図るため、「グローバル社会で求められる高い志と資質能力を育む」としている。（学校パンフレット第２号ｐ１）

・国際バカロレア（以下ＩＢ）が目指す１０の学習者像は、これからの社会を生き抜くために必要な要素となっている。

・高知国際中学校・高等学校は、学校全体として国際バカロレア認定を目指しているのは、この教育目標が、ＩＢの理念と一致しているからである。

・グローバル教育として、「英語教育の充実」、「探究型学習の推進」、「キャリア教育の推進」の３つをあげている。（学校パンフレット第２号ｐ１下）

・「英語教育の充実」については、外国人教員による授業や、英語以外の教科の内容を英語で学ぶ活動を多く取り入れていく。

・「探究型学習の推進」は、中学校ではＩＢのMＹＰに準拠した教育をとおして、課題解決能力を育む。高校では中学校の学習の成果をもとに、大学での研究につながるような、より高度な課題研究に取り組む。

・「キャリア教育の推進」は、高知南中学校・高等学校で国の研究指定事業により、長年培ってきたキャリア教育の実践の成果を生かして、生徒が自ら自分の将来について考える機会をつくる。進路指導を徹底する。

【国際バカロレア（ＩＢ）の認定校になるには】

・ＩＢ認定までの流れは、ＩＢ機構に認定について関心があることを登録する「関心校」、ＩＢ機構から認定を受けるためのアドバイスを受けながら準備をする「候補校」、ＩＢ機構から認定を受けた「認定校」の３段階がある。

・高知国際中学校・高等学校は、現在は「関心校」の段階。高知国際中学校は、平成３０年４月にMＹＰ候補校の申請を行い、２年間の準備期間を経て、平成３２年の夏ごろにMＹＰ認定校となる予定。

・MＹＰは候補校の段階からＩＢ教育を正式に行ってよいことになっているため、中学１年生の段階から正式なMＹＰが始まる。

・高知国際高校は、平成３１年４月にＤＰ候補校の申請を行い、開校する平成３３年４月までにはＤＰ認定校となる予定。

【高知国際中学校について】

・中学校は、ＩＢ教育のプログラムを用いながら、日本の学習指導要領に基づいた学習を行い、グローバル人材の基礎となる英語運用能力や探究力を育成する。（パンフレットｐ３）

・学校外での課外活動を充実させる。国際的な課題から地域の課題をテーマとして、主に県内の各地域をフィールドとして、放課後や休日、夏休みなどの長期の休みを活用することになる。学校も支援していくが、学校だけでなく、ご家庭のご支援が必要になるため、ご理解・ご協力をお願いしたい。

・英語教育については、コミュニケーションツールとして英語が使えるように学習を深める。具体的な目標として、英検での中学レベルは３級とされているが、中学校卒業までに全員が英検準２級の取得を目指す。１、２年生は、週に３時間は、外国人教員による授業を実施し、週に２時間は日本人教員と外国語指導助手による２人体制での授業を実施する。

・また、英語以外の時間を活用して、週に１時間は「英語で学ぶ」をテーマに、例えば、身体を動かす活動を全て英語で実施したり、社会の出来事や世界の研究について英語で学ぶ授業を、英語の教員とその分野を専門とする教科の教員の２人体制で授業を行う。

・時間割の例としては、他の中学校とカリキュラムに変わりはないが、主体的な活動時間を確保し、確かな学力を身に付けるために、１週間に32時間の授業を実施する。

・基本的には１日６限だが、週２回は１日７限まで授業がある。パンフレットの６ページに例を掲載しているが、あくまでも例である。確定したら、今後作成するパンフレットなどでお知らせする。

・中学校の主な行事については、プレゼンテーション大会やＩＢ校との交流ワークショップなど、ＩＢ校としての特色を活かした行事を計画している。（パンフレットｐ６）

・中学校では、授業の中で、生徒同士で話し合ったり、発表する時間があるため、放課後やご家庭での学習が重要になってくる。また、奉仕活動や課題研究など、放課後や休日を活用しての学習が用意さ

れている。

・そのため、部活動については、一定の制限を設け、平日の活動時間は原則１８時までとし、早朝練習は行わない予定。活動日は、原則として平日の週３日と土曜日とし、日曜日等の公式大会などについては許可制となる予定。なお、他の国公立のＩＢ認定校においても、課外活動等の時間確保のために部活動には一定の制限を設けていることが多いと聞いている。

・設置する部活動は、現在、施設などの条件も踏まえながら具体的な内容を検討している。明確になった段階で、今後の学校説明会などでお知らせしていく。

【高知国際高等学校について】

・普通科、グローバル科ともに文系・理系の進路希望に応じた教科が選択できる。

・授業は週３３時間で、週に３日、７限まで授業がある。普通科、グローバル科ともに、文系、理系を問わず、しっかりと学習できるカリキュラムとなっている。

・普通科は、「多様な進路選択に対応」するカリキュラムになっている。また、「主体性と自主性の醸成」を図るために、平成２７年度から行っている文部科学省の事業である高知西高等学校のスーパーグローバルハイスクールで培った「グローバル探究」による取組を生かし、発展させながら、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を養っていく。

・グローバル科は、１年次から探究コースとＩＢコースに分かれる。探究コースは、高い英語運用能力と探究力を身に付け、より高度な言語活動に取り組むことで、国際感覚と行動力を育成する。

・ＩＢコースは、高い英語運用能力と探究力を身に付け、世界規準のＩＢのＤＰを実施するコースである。ＤＰは２年間のプログラムで１年の１１月から始まり、３年の１１月に最終試験を実施する。
（１年の１０月までは、学習指導要領に定められた科目の授業を実施）

・グローバルな視野と教養を醸成するために、国際会議等での研究発表会への参加や、ＩＣＴを活用した異文化交流などを計画している。

・高知国際中学校・高等学校では、学習のスタイルは学科やコースによって特徴があるが、普通科、グローバル科に関わらず教員全員が、生徒の学習をしっかりとサポートする。

【施設について】

・中学生の教室は北舎に入り、新しくできる共用棟は中高生ともに使う特別教室などである。中学校が開校する平成３０年４月には、全館が Wi-Fi 完備となり、県立学校では、グローバル教育推進校である高知南中学校・高等学校と、この学校の２校のみである。（パンフレットｐ９）

【高知国際中学校の入学者募集について】

・正式に決定していないため、現段階での考え方は以下のとおりである。

・入学定員は原則男女３０名程度の計６０名の予定。

・検査日時は、現行の県立中学校と同じ考え方で進めている。

・検査会場は、高知西高等学校となる予定。

【検査内容について】

・小学校では国語や社会の分野に当たる「言語コミュニケーション分野」として適性検査Ａ、同じく算

数と理科の分野に当たる「数理・自然科学分野」として適性検査Ｂとして、それぞれ40分間で実施している。

・次期学習指導要領でも求められている深い学びにつながるように、思考力や表現力をこれまで以上に問う問題としたいと考えており、検査時間も４０分から延長したいと考えている。その他に、400 字程度の作文と個人面接を実施している。

【通学区域について】

・県内全域とするということで、１月に正式決定した。

・県内の小学６年生であれば、どなたでも志願できる。

・県外の小学生であっても一定の条件を満たせば、志願できるようにしたいと考えている。

・検査の実施内容などの、詳細については平成２９年３月末、検査日は平成２９年６月頃には正式決定する予定。決定したら、高等学校課のホームページ及び、高知国際中学校・高等学校のホームページに掲載するので、この学校に関する情報はそちらをご覧ください。

【事前の質問への回答】

Q．授業はすべて英語で行うのか。

A．英語以外の教科の授業は基本的に日本語で行う。この学校での授業は基本的には探究力を養うことを目指しており、深い学びを実践していくためには母国語が適している。ＩＢ教育は、母国語を大切にすることを重視している。英語の授業は、外国人教員を中心に英語で行う。

Q．学校での英語は、アメリカ英語なのか、イギリス英語なのか　。

A．英語で自分の考えを相手に伝えることができ、相手の意見を踏まえたうえで、議論し、お互いの理解を深めることができる、より実践的な英語運用能力が身に付くことが重要であると考えている。例えば、多様な国の人たちと、なまりのある英語であっても文脈から理解する力を養うことが大切である。

Q．英語力や国際力だけなく、日本人としての資質をどのように指導していくのか。

A．日本の歴史や文化などについて理解を深めたうえで、異文化を尊重する姿勢を養う。例えば、「外国と比較した日本人の気質」について、課題研究に取り組むといったことが考えられる。

Q．高校入学後、バカロレア科と普通科に分けられるのか。中学校入学時からバカロレアだけのクラスで高校まで進学するのか。

A．学校パンフレット第２号ｐ２下参照。高知国際中学校の生徒は、基本的に高知国際高校のグローバル科に入学する。高校のグローバル科の入学定員は８０名であるため、残りの２０名は、他の公立中学校や高知南中学校から入学することになる。

さらにグローバル科は、１年次から国際バカロレアのＩＢコース（２０名）１クラスと、探究コース（日本の学習指導要領に基づく学習活動を行う６０名）２クラスに分かれて学習する。

ＩＢコース、探究コースの選択は、中学校の３年間をかけて、生徒の将来の希望や適性を総合的に判断しながら、進路指導していく。

普通科（２００名）には、他の公立中学校や高知南中学校などから入学し、５クラス編成となる。

Ｑ．ＩＢのカリキュラムを導入すれば、通常の学校で実施されている内容のどの部分が省かれるのか。

Ａ．ＭＹＰでＩＢ機構が規定しているのは、基本的な学習計画の立て方や学び方であり、学習内容は、日本の学習指導要領に準拠したものになるため、特に省かれる内容はない。ただし、事前の調べ学習や基礎知識の習得、課題研究のまとめなどを家庭で行う学習時間の確保が、非常に大切になってくる。

Ｑ．週５日制か６日制か。

Ａ．基本的には週５日制であるが、土曜日にも生徒が自ら調べて探究していく課題研究などの課外活動を実施する。課外活動は、特別活動の時間に計画の立て方などの事前説明を行い、生徒が自ら計画、行動、振り返りを行うものである。放課後や休日、内容によっては夏休みなどの長期の休みを活用し実施する。ご家庭のサポートも必要になってくるため、ご協力をお願いしたい。

Ｑ．海外の大学受験を考えていないと入学できないのか。

Ａ．グローバル科では、海外大学への進学も視野に入れているが、基本的には日本語で学習するため、国内大学への進学が中心になると思われる。国内大学、海外大学に関わらず、生徒の進路実現に向けてサポートしていく。

Ｑ．入試は抽選か。

Ａ．抽選は考えていない。

Ｑ．発達障害のある生徒の受け入れは可能か。

Ａ．受け入れは可能。入学が決定してから、保護者の方などと、どのような支援が必要なのかご相談したいと考えている。

Ｑ．寮はあるのか。自転車通学は可能か。ＪＲでの通学は可能か。

Ａ．学校パンフレット第２号の１０ページのＱ３でもお答えしているように、設置の予定はない。通学区域については、県内全域を対象としているので、特に通学手段や距離などの制限は考えていない。

Ｑ．中学校の年間の授業料はいくらか。授業料以外に必要な費用はあるのか。

Ａ．学校パンフレット第２号の１０ページのＱ６にあるように、公立中学校なので授業料は必要ない。ただし、授業料以外には、他の県立中学校と同程度の教材費とＰＴＡ会費等で年間約４万円が必要。

Ｑ．国際バカロレアを学ぶ子どもの性格に向き、不向きはあるのか。

Ａ．ＩＢ教育は全人教育で、生涯にわたって学び続けることができる力を育成するものであり、お子様の性格によって向き、不向きがあるといったものではない。お預かりした生徒が、ＩＢが目指す学習者となれるように、支援していく。

Ｑ．高校の年間の授業料はいくらか。授業料以外に必要な費用はあるのか。

Ａ．学校パンフレット第２号の１０ページのＱ６にあるように、授業料は、保護者の所得によっては、最大で年間１１万８千８百円が必要となる。国の就学支援金制度により、平成２８年度実績で高校生全体の約８７％の方は、授業料は不要となっている。なお、就学支援金制度については、４人家族で保護者のうちどちらかが就労している場合、年収が９１０万円までの方が制度の対象となり、授業料を納付する必要がなくなる。

授業料以外に必要な費用は、探究コースは、県内の県立高校の進学校と同程度の教科書や教材費の購入や模擬試験等の受験料などが３年間で１８万円程度が必要。

ＩＢコースへ進学した場合は、ディプロマ・プログラムのテキスト代や最終試験の受験料など３年間で約２０万円程度が必要となり、他の県立高校とは約２万円程度の差となる。これ以外にも修学

旅行の費用や、部活動に係る費用が必要。

Q．ＩＢコースに進まない場合、教育課程や内容は違うのか。また、コース分けはどのように行うのか。

A．ＩＢコースは、ＩＢのＤＰを中心に実施する。探究コースは、学習指導要領に基づいたカリキュラムを実施する。コース分けは中学校の３年間かけた進路指導の中で行う。

Q．今までの学校の内容と違うことや、進路などが心配されるが大丈夫なのか。

A．中学校では、学習指導要領に則った学習を進めていくため、学習する内容は他の公立中学校と同じである。違うのは学習方法であるが、基礎的な知識を学んだ上で、他の生徒と協働して探究的な学習を展開していくことは、国も次期学習指導要領において改訂しているところである。これまでの学習方法と大きく異なる点は、生徒の評価を生徒にフィードバックし、生徒はそれを基に、次の段階に生かしていく「振り返りの作業」を、高校卒業まで常に繰り返して行うことである。

Q．海外の大学に進学する場合、ＩＢのスコアだけで合格できるのか。

A．国や大学ごとに入試の要件は異なる。例えば、イギリスやカナダの大学では、ＤＰスコアと面接で入学できる大学がある。アメリカではＤＰスコアに加えて、日本のセンター試験に当たるＳＡＴや英語検定に当たるＴＯＥＦＬの結果が求められる。ＤＰスコアでなく、ＤＰの中の特定の科目の成績だけが求められる大学もある。例えば、医学部は数学と物理の成績だけで良いという大学がある。従って、生徒が進学したい大学の入試の方針を調べて、ＤＰで選択する科目を決める必要がある。

Q．県内にＤＰスコアを活用して受験できる大学はあるのか。

A．現在のところ、県内大学の中にＤＰスコアによる入試を実施する大学はない。文部科学省とも連携して要請をしているところである。平成３０年４月に入学する１期生が高校に入学するまでには、全国的にはＤＰスコアを活用した入試を実施する大学は増加している。

Q．海外の大学に進学した場合、学費はどの程度かかるのか。

A．大学によって大きく異なる。アメリカの大学では年間 430 万程度。生活費も含めると 2,000 万円程度かかる場合があるし、国立、私立でも違う。一方、ドイツでは無償など国によって様々である。こうしたことから、中学生のうちから生徒が自分自身の将来の進路について考える機会を多くもち、国内外の大学についてしっかりと進路指導できる体制をつくり、生徒の自己実現を支援していく。

Q．高知市以外から入学できるのか。その場合、市内枠、市外枠のような枠があるのか。

A．通学区域は設けないため、県内どこからでも志願でき、市内枠や市外枠といった枠は設けない予定。

Q．奨学金制度はあるのか。

A．現在、高知県高等学校等奨学金制度がある。貸与金額は、月額１８，０００円、又は２３，０００円から選ぶことができる。中学校を通じてご案内する。必要な方はお申し込みください。

Q．指導できる教員はどのように確保及び育成するのか。

A．ＩＢの教員として教壇に立つためには機構が主催するワークショップに参加して資格を得る必要がある。現在、計画的にワークショップに参加している。また、ＩＢ認定校である東京学芸大学附属国際中等教育学校に２年間ずつ教員を派遣している。

現在、英語教員１名が２年間の派遣を終えて帰ってきており、現在さらに４名の教員を派遣しており、今後も派遣していく予定。中学校が開校する平成３０年度までに１３名の教員を派遣し、高知国際中学校に配属される教員全員が、実際にＩＢ教育に携わったことになるように計画している。

また、これとは別に、現在、５名のＩＢ教育推進チームが高知県教育センターでＩＢの教育を実践するためのカリキュラムの作成などの研究を進めている。

【当日、会場での質疑応答】

Q．現在、全国の公立の中学校・高等学校でＩＢを取り入れて、どのような効果が表れているのか。

A．これまでに聞いた卒業生（インターナショナルスクール）の話では、日本の大学では物足りないと応える方が多い。それは、学校生活において、自分で考え、探究していくという習慣が身についているということや、それを表現することに慣れているといったことが影響していると考えられる。ただし、現在は、日本にある公立学校のＩＢ校からは卒業生がまだ出ていないので、「日本で、日本のＩＢ校で学んだ学生がどうなるのか」というのはこれからである。

●閉会の挨拶要点

高知県教育委員会事務局　高等学校課　企画監　　坂本　寿一

説明会を聞いて、皆さんの懸念としては三点あるのではないかと思う。

一点目は、教員養成はできているのか。また、人事異動があるのではないか。

二点目は、定員が少ないのではないか。

三点目は、入試はどうなるのか。

【教員養成について】

・高知国際中学校に携わる教員は全部で 13 名程度を予定しており、その全員が国立の東京学芸大学附属国際中等教育学校に２年間、ないし来年度派遣する教員は１年間派遣し、実際に IB の授業を行った教員が授業をするため、１週間程度のセミナー受けてきた教員が行うわけではない。

・異動があるのではないかという点は、通常の定期的な異動を行えば、この学校の教育は成り立たないため、当面の間は、この学校の実質専属の教員となることを検討している。

【定員について】

・60 名から 80 名は少ないのではないかということに関しては、本日の説明にもあったように、きめ細かい教育内容を仮に定員 200 名の学校で運営していくことは、難しいと考えている。

・それだけ、手厚い教育を実施していくということをご理解いただきたい。

【入試について】

・現段階では決定していないため、お答えできないことをご了承願いたい。

・本来なら６月に決定するものであるが、皆様の関心が高いことから、３月末には入試に関する内容を決定し、公表する予定である。

・入試日については、諸事情により６月に正式決定する。

・今の時点では、例年通りとお考えいただけたらと思う。

最後に

・どうしてもＩＢ教育を受けたいという意欲ある生徒・保護者の皆様に来ていただき、活気ある素晴らしい学校にしていくために、人、物、金といった、県の総力をあげて学校をつくっていく。

・このような学校を東部・西部にもつくってほしいというご要望もあったが、県内３つの学校に、それだけのものを投入して運営していくことは、難しいと考えるため、ご理解をいただきたい。

・ぜひ、よろしくお願いしたい。